熊野の森から

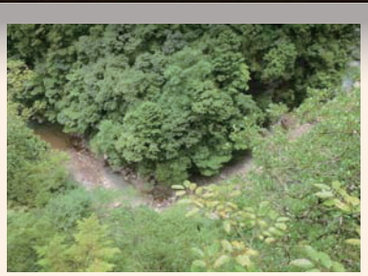
怪しの熊野

其の七十二

「本宮町の怪異（其の二）熊野本宮大社②」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

前回に引き続き、熊野本宮大社の話を続ける。これは、本宮の怪異を語る上で、本宮の皆さんの基本的な感覚と熊野信仰の話は切っても切れないからだ。



熊野の字は「くまの」と読むからこそ「よみがえり」の地としての意味を持つ。うっそうとした森林への畏怖、畏敬が熊野信仰の中核にあるようだ。

ところで、本宮来社の旧社地である大斎原（おおゆのはら）の「斎」は神聖であることを意味する字であるが、ここでは「ゆ」の読みが当てられている。かつて大斎原で湯立神事が行われていたことや「熊野権現垂迹縁起」に大斎原が「大湯原」と表記されていること、熊野を「ゆや（いや）」と読む際に湯屋や湯谷の字が当てられることがあり、これらのことから熊野信仰の中核に「湯」が関わっていると考える人は多い。熊野を「ゆや」と読むのは音読みのひとつ漢音読みの「ゆうや」から転じたもので、「いや」は漢音よりも古い呉音読みである。いずれも古代の中国での発音に起因しており、いわば古い時代の外来語である。また、渡来人によって持ち込まれた当時の朝鮮語由来だとする説もある。

金属（鉱山）と関係していると指摘されることが多い，熊野の代表的な妖怪「ひとつだたら」。本宮では「一本足」と呼ばれることもある。（イラストはBoBo）

一方、「くまの」の語源であるが、『紀伊続風土記』によると「熊野は隈（くま）にてコモル義にして山川幽深樹木蓊鬱なるを以て名づく」、つまり、うっそうとした森林に覆い隠されている場所を示す地名であり、さらに「死者の霊がこもる場所」だともいう。音読みの「ゆや（いや）」であるが、「熊」を「湯」だと仮定した場合、温めた水が一般的な解釈になろうが、「湯」は溶かした金属を示す語でもある。金属と神社、あるいは妖怪との関係は、よく語られるところでもあり、試しに音読みの「ゆや（いや）」の地名とかつての鉱山の位置関係を調べてみたが、明確な関係性は見つけられなかった。温泉との関係性や、地名になるほどの湯立神事が行われていた可能性のある大きな神社は、堺市の熊野（くまの）神社（地名が「ゆや」読み）を除き、数々ある「ゆや（いや）」の地になかった。

以上のように、熊野の字は、その読み方によって意味がまったく異なっている。訓読み、つまり日本語として「くまの」と読むことによって、深い自然の中に万物の魂が帰っていくという熊野信仰の根幹をみることができるのでなかろうか。そこには、数々の怪異話も潜むことになる。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。